

物語は、日本軍がビルマでイギリス軍と激戦を展開していた時代が、著者の語り口調で綴られています。主人公の水島上等兵は音楽学校出身で、音楽好きの隊長の補佐役として先兵を切る人物です。戦況悪化の中でも、水島手製の豎琴により、隊の士気と規律が守られていました。ある時、敗走中に四方を敵に囲まれ絶対絶命となった場面があります。ジヤングルで息を殺して、敵に防戦の様子を見せない手段として、はにゅうの宿を歌いました。この歌はイギリス民謡で、殺すか殺されるかの状況下では、敵兵も故郷を思い、一緒に合唱しはじめ、無駄な血を流さずすみました。間違った戦争でも、人間の心は存在し、狂った精神を正す力が音楽にはあるのでしょうか。やがて、敗戦となりますが、まだ応戦する日本隊があり、水島が降伏の説得にいきます。しかし、決死の部隊はこれを聞き入れない。水島は生きることが大事と、なおも説得する最中に負傷します。幸い現地の人々に介抱され、自分の部隊に戻ろうとする道中、同胞の屍に遭遇し、自らは帰国を諦め、ビルマ僧となって弔うことを決意します。隊長以下、水島は死んだと思っていますが、通信がとれない中で、インコに「水島帰ろう」と、人を介して呼びかけます。水島は、新たな使命を抱いてから、部隊との接触を避けます。部隊の帰国が叶ってからは、水島は、別のインコに「帰れない」と応えます。いざ、帰国の日、水島は、はにゅうの宿を奏し、姿を現しますが、言葉は交わさず、手紙に思いをいたしました。戦友の無事を確かめ、僧となつて、異国で同胞の安息を祈る一人の兵士のいきざまから、戦争について考えさせられます。

F M .

金の星社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞